

# 森林と人を活かす知恵 127

## 良いものを目指することで森林の好循環を

岐阜県立森林文化アカデミー 准教授 ● 松井 匠

岐阜県加茂郡川辺町で今年の4月8

日、山楠公園リニューアル式典が開催さ

れ「クースの家」が披露目となった。

この建物は川上・川中・川下の見事な連

携による地域材活用の好例と同時に、

「良いものを目指す」という意識を中心

にした地域循環の一例となったので紹介

したい。

「クースの家」は川辺町基盤整備課と

可茂森林組合が企画したオール川辺町

産材による公園の木製デッキ建設計画

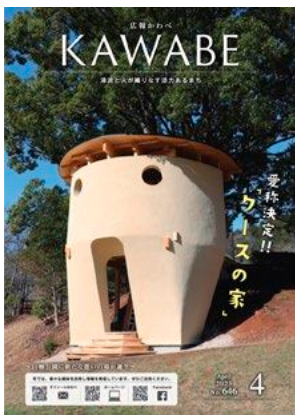
である。元は森林環境譲与税による山

主の意向調査からスタートした計画で

「町にお任せする」という意向を得て可

茂森林組合が整備を実施した。木を伐

るだけでなく町内の公園で使うことで



「広報かわべ」の表紙を飾る



曲面壁の下地は根気のいる大工仕事

森林整備サイクルを町民にも理解して

もらう機会にしたいというものだった。

アカデミーからは建築専攻の田村聡

さんが設計協力として携わった。下職も

地域の職人で、材も技術も地産地消の

体制で構成されている。

川上・川中・川下の連携を向上するこ

とが木材の流通促進、森林保全の好循

環を生み出すことは知られているが、今

回は将来のメンテナンスも地域で行える

ことで中長期的にも地域経済循環が継

続している。また移送時のCO<sub>2</sub>排出量

削減にも寄与していることから、持続

可能な木材利用の基本的なルールを全

て備えた取り組みだった。

アカデミーは「良いもの」を設計協力

することを期待され、応える形で提案

した。

川辺町は「こんなに良いものができる

なら追加予算はなんとか確保したい」

と増額に対応し、可茂森林組合は「川

上側からも、良いものをつくることでま

ちづくりに貢献したい」と確認申請費

用や受託研究による学生のバイト代を

捻出、県森連は「意義のある連携や活

動だと感じたので手間がかかってもい

い」と各種変更手続きを了承し、東濃ひ

のき製品流通協同組合の鈴木氏は「ど

うせつくるなら良いものになりたい」と困

難で手間のかかる曲面壁を見事な大工

技術で納めた。

今回の好循環の要因は、

1、可茂森林組合が大きいビジョン

でまちづくりに貢献しようとし



オール川辺町産材の木組が見えるシンボルデッキ



設計協力担当は  
森林文化アカデミー学生の田村聡さん

以上が、重要だったと言える。  
好循環を別の地域でも実現するため  
に参考にされたい。

- 2、関係者がお互いの仕事を信頼し合っていること。
- 3、アカデミーが「良いもの」を提示できたこと。

ており、通常の業務範囲を超えたハブ的な動きをしていること。

同様に大工の鈴木氏が大工作業

だけでなくアカデミー側や製

材、乾燥、下職と綿密に情報共

有を行い、関係者が良い建物に

しようと動いていたこと。

2、関係者がお互いの仕事を信頼し

合っていること。

3、アカデミーが「良いもの」を提示

できたこと。